



「此家の伯母さんがね、親切にして呉れるんでいくらか心丈夫なんですよ」全く心丈夫なのらしい。歸省して昨日上京つた律子は、届け物かたぐい今日この飯田町の奥に友を尋ねた。祖母なる人の陰心配に、自分の思わくもこき交せて、七月と聞いた友の身の上を、如何する積りか知らずと道々考へて来たのであつたが、来て見れば性分とは云へ案外平氣なもの。さすがに懐しがつて聞く故郷の噂も、大方例の快活な笑ひに値するものばかりであつた。

「何て氣樂な人なんだらう！得だわねえ」と律子は思つた。上京る前の日も、わぐりの家の隠居所に尋ねて、繰り返し頼まれたことや、愚痴ごとを思ひ出した。

「祖母さんも大へん心配して居らつしやいましたつけ」多くは言はないで、たゞ思つた。早生れなのでわぐりは律子より一つ多かつたが級は同じかつた。小さい時から無口で心の引立たなかつた律子は親しい友達としては一人もなかつたが、誰にでも直ぐ仲よくなつてまた仲悪くなるわぐりと一度仲よくなつてからは、家の近かつた故もあらうが、不思議に、交りが親しくなつた。二人とも町家並に小學校だ

けてよして、一年違ひにわぐりは早く二本松の商家に嫁入つた。二年目の正月に里歸りしたまゝ、一年半ばかり隠居所に暮したわぐりの云ふ所によると、嫁入先の姑は夫の繼母で常々折合が悪く、殊に自分が嫁つてからは猶更激しかつた。それで夫は今家に居ないと云ふ。姑をよく言はないは勿論のこと。東京に出て某會社の書記の役とを見付けた夫から手紙を受取る度、わぐりは獨り住みの寂寥さを感じた。淋しさに堪えられなかつた。生れるとから手しほにかけた祖父祖母は、其様な邪見な家にはもうやらぬと云ひ、東京へは猶更やらぬ、暮してゆけるか、其麼弱い躰で如何するのだと、いつかな肯かぬ。わぐりは弟が、時として現る食客待ひに、輪をかけて自分が上京心を募らせた。猶、其頃不幸にも夫に死に分れて家に歸つて居た律子に、輪に輪をかけては居づらがつて、同情心を買つて、そして其同情心で益々己が上京心を確かにした。間もなく弟嫁が決つた。際に、祖父祖母を説きつけてわぐりはついに上京した。また一年後れて裁縫學校に入學した律子が尋ねた時は、早や可なりの東京通になつて居た。狭い乍ら一軒の家を持つて居た時も、子供の無い綺

麗好きな上役の家の二階に住んで居た時も、この陰氣臭い狭苦しい座敷住居にも、尋ねる度に律子はいつも

快活なわぐりの笑ひを浴びる。夫は今某商店に通ひ番頭の身の上だとやら。

「いゝ柄だこと！赤ちやんのに？」起ちながらふと目に止つた隅に押し遣られてたメ

「何處まで氣樂なんだらう！」律子はまた自分の心にひきくらべた。

送り出して座敷に戻つたわぐりは、竹の皮の八の字になつて驚饅頭の黄な色を見て、蓋とつて見た鐵瓶の湯氣の熾なのを見ると、戸口にむけて呟えた聲。「伯母さん居らつしやいなお茶入れますから」



年のくれ

「へい有難う」

やう／＼に立膝をおろすと、減り氣味の湯はち／＼ととなり出した。

(評) 前回の此人の「一年」に比べて内容の單純なるが飽足らぬ、姪嬢と云ふ事に對する女性の心の動搖、之は女性ならでは描かれぬ、而も人生の大問題だ、折角懸る問題を捉へながら輕々に叙し去つたのが重々しく惜しむべきだ。

五等

○、ほろろ

本所區外手町六十一番地 田中 久子

お高は東京のお邸から二三日の暇を貰つて、今日一年ぶりに故郷へ歸つたのである。去年の秋、村を出る時迄は小さい弟や妹達が汚した儘で在つた古畳も今は思ひ出されぬまで綺麗にかへられて、背戸には小さい菊島の如なものさへ出来て居る。氣のせむか阿父様の頬も太つた如だし阿母様の眉も美しく剃られて、凡て家中のものは皆お高にいひしれぬ嬉しさを覺えさせる。是も自分が奉